

指示対象の捉え方から見るソとアの使い分け

モスタファ・ヤスマーン（名古屋大学言語学博士後期課程）

要旨

日本語の指示詞コ・ソ・アについては、従来、多くの研究がなされてきた。談話における聞き手の存在の重要性に関心を向けた研究者もいれば、聞き手の立場を全く考慮せず、指示詞選択の判断を全て話し手に帰する研究者もいる。本稿では、ソとアに焦点を当てながら、談話において話し手のみならず、聞き手の存在も指示詞の選択に重要な役割を果たすと主張する。また、ソとアの使い分けに関する要因は、田窪・金水が提案した話し手の直接的経験・間接的経験という説が常に当てはまるのではなく、談話における聞き手の存在及び、話し手と聞き手が指示対象をどのように捉えているかということが関わっていると考える。データ分析の結果、直接的経験・間接的経験という説で説明できない場面が多いということが明らかになった。また、話し手と聞き手の指示対象の捉え方から生まれるソとアの使い分けについて新しい仮説を立て、考察を行った結果、「ソ」と「ア」は、話し手と聞き手の指示対象に対する認識のレベルや関わりの度合いによって使い分けがなされるということが分かった。

0. はじめに

日本語の指示詞コ・ソ・アについては、従来、多くの研究がなされてきた。金水・田窪は指示詞研究に大きく貢献しており、話し手と聞き手の対立の有無により、融合型探索と対立型探索の運用を提案した。本稿では、金水・田窪が提案した複数の心的領域モデル、いわゆる「直接経験的領域」と「間接経験的領域」を検証し、新たな提案を導き出すことを試みる。金水・田窪の提案によれば、ア系列は談話中で導入される「直接経験的領域」に属する話し手の過去のエピソード情報や実際に自分と何らかの直接的な関係がある経験を指す時に用いられる。一方、間接的に獲得された、つまり話し手が自分で実際に経験したのではなく、他の手段を経由して情報が入る、いわゆる「間接経験的領域」が談話中で導入される際には、それに属する情報はソ系列で指示される。しかし、実際には、この提案に一致しない場合もある。そこで、常に「直接経験的・間接経験的」の違いによって、アとソの使い分けの作業が行われるのではなく、それらの選択に他の要因も働くと考え、アとソのいくつかの例文を分析しながら、再考察を行う。

1. 先行研究による指示詞の機能

日本語の指示詞コ・ソ・アは、古くから多くの研究者の注目を引き、様々な観点から広く研究してきた。指示詞の研究史というと、佐久間鼎の研究から語り始めるのがほぼ常識である。佐久間(1983)は指示詞を人称代名詞と相関させ、コ・ソ・アをそれぞれ一人称、二人称、三人称に関係付けている。また、久野(1973)は文脈指示のア系列、ソ系列について次の結論を出している。

ア系列指示：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ系列指示：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

一方、金水・田窪も指示詞の研究に大きく貢献しており、話し手と聞き手の対立の有無に基づく融合型探索と対立型探索の運用を提案した。次節で田窪・金水が提案した心的領域に基づく仮説を提示する。

1.1 田窪・金水の心的領域に関する仮説の検証

1.1.1 対話者の談話への効率的な貢献

適切な対話が正確に成立するためには、話し手と聞き手、つまり最低条件として二人以上の参加者の存在が必要となる。一人のみであれば、対話ではなく、独り言ということになる。対話により、対話者の間に情報の交換という作業が行われ、この情報の交換を通して話し手が相手の知らない新しい情報を教えてたり、相手に自分が知らないことを聞いたり、二人で以前一緒に経験したことのある出来事を思い出したりして、情報を共有する。どの対話においても情報の交換が円滑に進行するには、話し手が相手の知識のレベルや話題との親疎度を念頭に入れておく必要がある。すなわち、相手の知識内に存在しないと想定したことを、適切な言語形式を使用しながら、新情報として導入することになる。また、相手の知識内に存在すると想定したことについて述べる場合は、それに合った言語形式を使用し、その内容を復習したり、回想したりするという形になり、情報確認の作業を行うということになる。対話の参加者が互いに相手の立場を考慮し、話題との関係、つまり知識の有無から生まれる指示詞の使い分けの規則を守り、情報の交換を適切に行うことにつき成功したとき、確実な談話が成立したということができる。このような対話・談話における情報の交換は「談話管理」と呼ばれ、談話管理に参加するものとしての聞き手・話し手は「談話管理者」と呼ばれる（金水・田窪 2004）。一方、話し手が話題に関する相手の情報量を想定しないで、対話を話し手のみの観点から進行させようとしたら、相手の存在を無視していることになり、対話が独り言のような語りの形に変換することになる。このようなことになったら、談話管理に必然的な条件である、対話への話し手と聞き手の相互の貢献による効率的な情報の交換が失われ、最終的に、談話が中断されるという結果になる。

1.1.2 聞き手の存在と談話領域

前節でも述べたように、談話は常に、話し手及び聞き手という二人以上の参加者から成り立つ。また、話し手が対話に情報や提案などを導入する際は、相手の知識領域を考慮することが談話管理の成立条件となっている。しかしその一方で、田窪・金水（1996）は、話し手が想定する聞き手の領域を考慮せず、言語形式（本稿では、指示詞を扱う）の使い分けの判断を全て原則として話し手のみに帰している。そして、二つの心的談話領域を提案し、話し手が聞き手とは無関係に、この談話領域に即して指示詞の選択を行うとしている。田窪・金水が提案した心的談話領域を以下に引用する。

D－領域（長期記憶とリンクされる）

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。直示的指示が可能。

I－領域（一時的作業領域とリンクされる）

まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。記述などにより間接的に指示される。

この二つの心的領域を前提とすると、ア系列の指示詞はD(irect)ー領域、ソ系列の指示詞はI(indirect)ー領域に属する対象を検索するということになる。しかし、この規定は全ての場合に当てはまるのであろうか。このことを次節で詳細に考察する。

2. 直接的情報・間接的情報による指示詞の選択

談話においては、話し手と聞き手の相互行為によって初めて情報の交換が成り立つ。話し手が聞き手の知識領域を考慮せずに対話を続けようとした場合、その相互作用がなくなり、対話における聞き手の役割の重要性は小さくなってしまう。田窪・金水（1996）が設定したこの二つの心的領域は、指示詞選択の判断を、聞き手の知識は問わずに、全て、話し手がその出来事を直接経験したかしていないかということに帰している。すなわち、談話において、話し手が自分で実際に経験したことがあることについて言及したい時は、話題になる出来事についての聞き手の知識の有無を問わず、Dー領域に属している経験として、アで指示するのが普通であると指摘している。逆に、直接的な経験を通して得られたことではなく、間接的な方法により得られた情報、つまり現在の対話で初めて導入されたこと、誰から受け取った情報、ニュースや新聞などから得られた情報などのような他の仲介手段を経由して入った情報は、全てIー領域に所属しており、ソで指示しなければならないというのが田窪・金水の提案である。

つまり、この提案によれば、ア系列指示詞の使用は、従来議論してきたこととは異なり、話し手と聞き手の共有知識とは関係なく、話し手個人の直接的経験としか関係を持たないということになる。また、ソ系列指示詞の選択も、聞き手の立場を考慮することなく、話し手の発言する情報が間接的に獲得されたものであり、主観的に扱うことができないからということになる。このことは次の二つの例で示される。

- (1) 昨日神田で火事があったよ。 {?あの／＊その} 火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ。

(田窪・金水 1996)

- (2) A：先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。

B：その火事のことは新聞で読みました。

(東郷 1994)

田窪・金水が設定した心的領域の提案によると、この二つの例文の説明は次のようになる。例文(1)では、話し手が自分が実際に見聞きした火事について話しており、聞き手にとっては新規の情報であっても、それは関係なく、話し手にとっては直接的な経験による情報であるため、ア系列で指示する方が容認度が高いのである。話し手は、直接経験した火事の属性について話しており、その属性に基づく死者の想定を導き出す際、Dー領域にアクセスしている。また、例文(2)のBのソ系列の選択は、談話で提供されている情報が直接的な経験ではなく、間接的な経験によって得られたものであるからである。つまり、話し手のDー領域に格納されている情報には、談話に登場した情報と一致するものがいない。そこで、話し手は、談話中で初めて提示された情報を一時的に確保する領域としてのIー領域にアクセスしてい

るので、ソ系列で指示示すのが最も適切であると考えられる。このような説明では、聞き手の立場は全く考慮されず、話し手の立場のみが重視されるということになる。

本稿では、聞き手の立場を改めて考慮し、指示詞の選択には話し手自身の直接経験のみでは足りず、指示対象に対する聞き手の知識のレベルも考慮する必要があるということを主張する。それが正しければ、ア系指示詞は、直接獲得された情報のみを指示するとは限らず、間接的に得られた情報であっても、聞き手との共有知識であり、その指示対象に対する認識の度合い・親しさのレベルが高いという条件が満たされていれば、ア系指示詞の使用が可能になる。一方、話し手にどっては直接的な経験であっても、聞き手の立場との関係によつては、ソ系列を使ったり、ア系列を使ったりすることになる。

2.1 例文の再考察と仮説

本節では、上述の例文の再考察を行った後、本稿の主張に基づく仮説を立てる。

- (3) 昨日神田で火事があったよ。 {?あの／*その} 火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ。

(再掲)

この例文では、話し手自身が実際に経験したことのある災害について語っており、この災害が話し手と強い関わりがあることは確かである。それは「～のことだから」という表現から分かるように、話し手が持つ火事による被害についての知識が反映されているからである。話し手は、この火事の現場において、被災状況を実際に見聞きしたため、その状況に強く衝撃を受けていて、この気持ちを含めて災害の情報を聞き手に伝えることにより、聞き手の同情や気持ちの分かち合いが得られると考えている。久野（1973）によると、ア系指示詞の使用には、話し手と聞き手との間に共通の経験があることが必要条件になっている。話し手が聞き手と共通の経験をア系で指示することにより、二人が同じことに関して、同様の気持ちを持っており、そのことに関する気持ちや思い出などを共有しているという意味になる。同様に、この例では、話し手に関わりの深い経験で、聞き手は知らなくても、ア系指示詞で指示することにより、聞き手も同じような気持ちを持ち、災害に関する感情を共有することになる。つまり、この例文でのアの役割は、談話に直接的経験を導入するというよりも、自分の経験をア系で談話に導入することにより、そのことに聞き手も関わらせ、仮想の共有の世界を作ることにあるということになる。

- (4) A：先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。
B：その火事のことは新聞で読みました。

(再掲)

田嶋・金水の説明によれば、Aが談話で導入している情報は、自分の直接的な経験によるものではなく、間接的な手段、つまり伝聞・報道などによって得られた情報であるため、I - 領域に関わっているということになる。また、その情報は、Bにとっても談話中でのみ提示された情報なので、I - 領域に帰属していると考えられる。しかし、本稿では他の解釈を提案する。

A が談話で導入した情報は直接経験したことのある出来事だと想定することもできる。なぜなら、この文には、「～ようだ」「～そうだ」「～らしい」など、伝聞・報道等のいわゆる間接的な獲得方法を表す助動詞が使用されていないからである。しかし、A は、自分が導入している情報が、発話時点で聞き手に共通のものであるかどうか分からぬため、聞き手の立場を考慮して、ソで提示している。

また、B のソの解釈にも二つの可能性があると主張したい。一つ目は、この火事について新聞の報道より細かい情報が得られたが、B には何らかの理由でその詳細まで入り込もうとする気がないか、もしくは、災害について深く考えず、自分の立場から遠ざけたい場合である。つまり、災害に自分の気持ちを関与させたくないことを示すために、ソを用いた。この場合は、あたかも情報が相手の領域に帰属しているかのように話している。二つ目は、B がこの火事について新聞から得た「神田で火事があった」というわずかな情報しか持っておらず、事故の詳細までは知らないという場合である。つまり、B が「その火事のこと」のソで指しているのは、A の発言前半の「先週神田で火事がありました」という部分であり、後半の情報は含まれていないということになる。

このように、二つの解釈があり得るということは、次の結果を導き出すことができる。ソの使用には、話し手または聞き手の指示対象に関する知識や情報が少ないということを指摘する機能がある一方、指示対象または話題になっているものに対して、かなりの情報を持っているが、自分とは関係ない、あるいは自分とは関わらせたくない話題であり、相手の領域にとどめておきたいということを指摘する機能もあるのである。

以上の二つの例文から次の仮説を立ててみる。

仮説：

1. 指示対象への認識や関わりの度合いが話し手も聞き手も高い場合、あるいは話し手が聞き手に話し手と共通の認識や関わりを持つことを要求する場合、ア系列指示詞を使用することができる。
2. 話し手が指示対象に対して持っている認識や関わりの度合いが聞き手よりも低い場合、ソ系列指示詞を使用することができる。

この仮説を立証するために、以下で更に例文を分析してみる。

2.2 考察

2.2.1 ア系列指示・ソ系列指示の使い分けに関わる状況

本稿の仮説を立証するために、作例を作り、名古屋大学の大学生日本語母語話者男女 37 人、北海道大学の大学生日本語母語話者男女 62 人に配布し、「ソ系」または「ア系」のどちらかを選択してもらつた。その結果を以下で考察したい。

- (5) (二人が海外にいるが、3月 11 日の日本の地震について話している。二人とも地震についての情報のレベルは同じだとする)

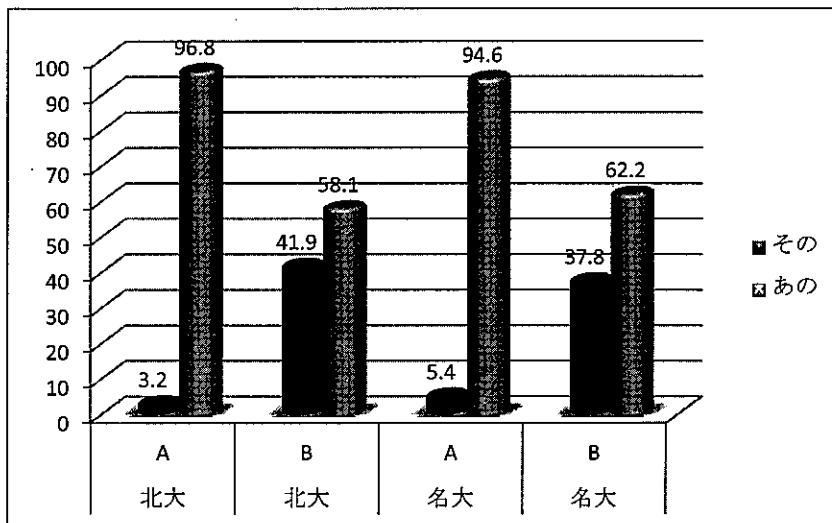
A：（その／あの）地震は本当に恐ろしい災禍だった。友人が二人津波で流された。

B：それは気の毒ね！！私の親戚の自宅も（その／あの）津波で流された。今、避難所にいる。

(作例)

この例文では、A も B も実際に経験していない地震について話している。つまり、地震が起きた当時、二人が日本におらず、海外に滞在していたという想定の例文である。母語話者の回答を見ると、「あの」が A でも B でも圧倒的に多いという結果が得られた。北海道大学の学生の A の「あの」の選択は 96.8% を占め、B の「あの」の選択も 58.1% を占めた。同様に、名古屋大学の学生の A の「あの」の選択は 94.6% を示し、B の「あの」の選択も 62.2% を示した。以下の図①に結果を示す。

図①



この結果から考えられるのは、金水・田窪が設定した心的領域による「直接的経験」「間接的経験」の理論は、常に指示詞の選択を説明できるとは言い切れないということである。この例文が説明している状況は、地震が起きた際、対話者は海外に滞在していたため、その地震を実際に経験していないということである。したがって、母語話者の「あの」の選択は、直接的経験に基づいているのではなく、他の要因が関わっているに違いない。それは、本稿の仮説である「認識や関わりのレベル」の役割である。

二人が地震の際、現地におらず、実際に地震を経験しなかったのは確かにそのとおりであるが、二人は共通の母国である日本との絆を強く感じていて、その震災にあまりにもショックを受けたため、あたかも自分がその災害に逢ったかのように感じている。また、自分たちに身近な友人や親戚が亡くなったり、被害を受けたりしたため、身近な人々に同情したり、彼／彼女らのこれからを憂慮したりして、震災を強く意識している。そのため、A、B どちらも「あの」を選択したのではないだろうか。

次に別の例文について検討してみよう。

- (6) (二人が東京スカイツリーについて話している。実際にまだ見ていなくて、テレビでしか見ていないとする)

A：ねえねえ、今朝、東京スカイツリーがテレビで映ってたよ！

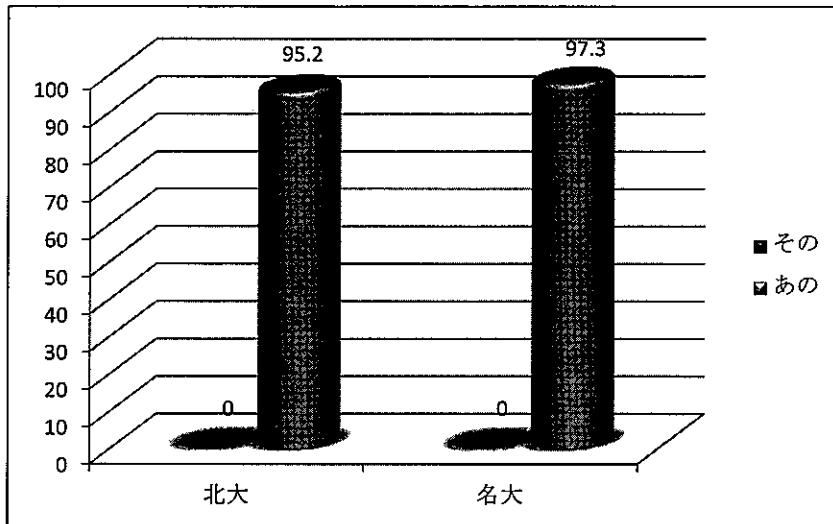
B：うん、見た見た。（それ／あれ）ってすごいよね！高さ何メートルあるって？上ってみたい。

(作例)

指示対象の捉え方から見るソとアの使い分け

この例文も、A、B 共に東京スカイツリーを目の前で見たことがないという設定に基づいている。しかしそれにもかかわらず、回答者は全員が（北海道大学 3 人、名古屋大学 1 人は未回答）B の答えとして「あれ」を選択した。図②にその結果を示す。

図②



対話者は二人とも、スカイツリーを実際にまだ訪れておらず、スカイツリーについて得られた情報は、間接的な方法、つまりテレビ、新聞など報道によるもののみであるにもかかわらず、母語話者の回答から見ると、間接的な方法だからといって、ソ系列を使用すべきだということにはなっていない。スカイツリーは最近完成した日本の代表的な最も高い塔であり、最近話題になっているので、誰もが知っているはずの観光名所である。したがって、二人とも実際に見てはいなくても、それについての情報はよくテレビで見たり、雑誌で読んだりしていて、他の塔と容易に区別することができる。したがって、目前で見ていなくても二人ともよく認識していると言えるため、「あれ」を使うことができる。

続いて、以下では、先行研究に掲載された例文を考察する。これらは全て、金水・田窪の『指示詞（2004）』に挙げられているものである。

(7) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。

(8) A：先生が学生だった時には、どのように勉強されたのですか。
B：あの頃は本がなくて、本当に苦労しました。

例文 (7) では、話し手が聞き手（会話には現れていないが、場面としては必ず存在する）に向かって、自分がかつて教えてもらった先生との経験について話している。この人物が聞き手に知られていない人物であることは、(7) の前半で対象の先生が初めて登場しており、更に、「～という」という聞き手に対して未知の情報を提示する際に用いられるメタ言語形

式が使われていることから分かる¹。それにもかかわらず、「あの」が使われているのは、話し手が情報をただ客観的に伝えているのではなく、あまりにもすばらしい経験だったという気持ちを聞き手と分かち合いたいと思っているためだと考えられる。すなわち、「あの」を使うことによって、話し手は、聞き手にもこの先生の教育のすばらしさを知ってもらい、この先生の下で勉強したいという気持ちを持ってもらいたいと思っているのである。

(8) でも同様に、Bは、自分が勉強した頃は、いかに大変で、本探しにもいかに苦労したかということを相手に生々しく伝えようとしていて、その気持ちをAにも共有してもらうために、ア系列指示という共通の経験を要求する表現を使用している。

次に、(7)を(9)(10)と比較してみよう。

(9) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も（？＊あの／その）先生につきなさい。

(10) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も（？＊あの／その）先生につく気はありませんか。

例文(9)、(10)は(7)とは、情報の提供の仕方が異なっている。(9)では、話し手が聞き手に向かって何かを言っているのは確かだが、今度は命令の形になっており、その命令を遂行するのは聞き手である。従って、このような場面においては、聞き手の立場がより重要になってくる。話し手は以前山田先生に教わったことがあるが、その経験について聞き手に情報を与えようとしているわけではなく、聞き手が山田先生を知らないことは承知で命令しているため、自分よりも聞き手の立場の方が重要ということになる。また、(10)では、後半は質問の形になっている。質問は、話し手が聞き手に、聞き手が持っている（と話し手が想定する）情報、あるいは聞き手についての情報を求める際に用いられる情報要求の方法である。よって、質問においては、質問する側よりも質問される側の立場の方が重要ということになる。そこで、この例文でも、話し手より聞き手の立場を重視する言語表現であるソが使われている。

(11) A：中央研究所の吉田をご存知でしょう。

B：ああ、（その／？＊あの）方は確か、あなたと同期で入社されたとかいう、慶應出身の方でしたよね。

Aが導入した吉田が、頭に蓄積されている特定の性質を持つ吉田の属性に一致しているかどうか、発言の時点ではBはまだ分かっていないため、ここでは「その」のほうが適切である。

(12) A：昨日山田さんという人に会いました。（その／＊あの）人、道に迷っていたので助けてあげました。

B：（その／＊あの）人、ひげをはやした中年のひとでしょ。

¹ 田窪・金水（1996）では、固有名詞を使用する際に、共有性の前提がある。この前提が崩れた場合、日本語では「山田君」のような裸の形の固有名詞は使うことができず、「山田君って」のように引用の形式を含む形にしなければならないと述べられている。

A： はい、そうです。

B： (その／あの) 人なら、私も知っています。私も (その／あの) 人を助けてあげたことがあります。

(11) と同様に、(12) B の最初の発言の時点では、対象の人物の属性が、頭の中にある候補者と一致しているかどうか、まだ確認できていない。そのため、「その」の方が適切であった。しかし、会話の流れとともに、確認ができたため、二つ目の発言では「その」も「あの」も可能になる。その使い分けは、話し手が対象との関わりをどう捉えているかによって決まってくる。

3. 結論と今後の課題

本稿では、日本語の指示詞、とりわけ「ソ」と「ア」の使い分けに関わる条件や状況を考察した。田窪・金水（1996）の提案を検討した結果、適切な談話が成立する条件として、聞き手の立場を考慮することは必然的な要素であることが明らかになった。また、田窪・金水（1996）が提案した「直接的経験・間接的経験」による指示詞の選択という仮説は、当てはまらない場合があるということも明らかになった。そのため、新たな仮説を立て、いくつかの例文を分析しながら、指示詞の選択に他の要因が関わっていることを立証した。すなわち、指示詞を用いる際、話し手は相手の立場を考慮しながら、指示対象が自分とどのように関わっているか、自分がどのように認識しているかを判断した上で、指示詞を選択している。

「ア」系列指示詞は、話し手と話題になっている対象のかかわりや結びつきが強いことを示す。また、相手を自分の世界に引き寄せて共感してもらいたい場合にも適用される。それに対し、情報量とは関係なく、指示対象と自分の関わりが弱いと感じ、認識の度合いが低いことを示すのが、「ソ」系列指示詞の役割であることが明らかになった。

本稿では、相手に未知な情報を導入する場合でも、特定の目的を果たすために「ア」が使用できるということが明らかになったが、これは新たな疑問を引き起こす。それは、「ソ」と「ア」と「定性」の結びつきである。「ア」は、対話者の間の共有知識を指示するという前提があるため、「定名詞句」を表すはずであるが、今回のような場合はどうなるのだろうか。指示詞による「定性」の表し方については今後の課題にしたい。

参考文献

- 1 佐久間鼎（1983）『現代日本語の表現と語法』くろしお出版
- 2 金水敏・田窪行則（2004）「日本語指示詞研究史から／へ」『日本語研究資料集 指示詞』第1期第7巻 ひつじ書房
- 3 金水敏・田窪行則（2004）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『日本語研究資料集 指示詞』第1期第7巻 ひつじ書房
- 4 田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3), 59-74
- 5 東郷雄二（1994）「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』1巻、27-46
- 6 金水敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学・国文篇：大阪女子大学紀要』39号、1-24
- 7 久野障（1973）『日本文法研究』大修館書店、185-190